

—気づきの一本指—

遠藤博因 hakuin@river.ocn.ne.jp



今回も禅の逸話の中から一つお話させていただきます。

俱胝(ぐてい)和尚は、誰が何を問うても、ただ指を一本立てた。

ある日、訪問者が和尚に仕えていた小僧に、「あなたの師匠はどんな禅を説かれるのですか」と問うた。

小僧は、師匠が普段やっているように、指を一本立てた。

これを知った俱胝和尚は、刃物で小僧の指を断ち切った。

小僧が号泣して逃げ去る際に、和尚は小僧を呼び止めた。

振り返ったところで、和尚は指を一本立てた。小僧ははっと気付いた。

今回のお話は、小僧さんが師匠の真似をしたところ指を切られてしまったという、小僧さんにとっては何とも可哀そうなお話です。俱胝(ぐてい)和尚はどんな質問をされても、ただ指を一本立てて答えとしていました。その真意はどこにあるのかというと、禅は不立文字(ふりゅうもんじ)と言われるように、文字や言葉に依拠しないということから来ています。文字や言葉を使ってあれこれと説明したところで、本当の真実は伝えることができず、体験を通じてのみ真に物事を伝えられるということなのです。たとえば、このお茶はどの程度熱いですかと聞かれ、舌が少し火傷しそうなぐらいですと答えたとします。また温度計で測ったら何度ありましたということもできます。聞いた者は自己の経験側に照らし合わせてお茶の熱さを感覚的に把握することはできますが、このお茶を直接自分の口に運ばない限り真にこのお茶の熱さを体験することはできません。このようなことから禅は文字や言葉に頼らず個々人の直接的体験に重きを置いています。俱胝和尚もどんな質問に対してもただ指を一本立てて答えるという流儀には、それ相当の体験に立脚した表現でありました。(詳しくは季刊 CL51 号 2009.1 を参照ください。)

そのような流儀を小僧さんは軽々しく真似てしまいました。そこで俱胝和尚は、単に感情的に怒ったり、懲罰のつもりで小僧の指を切ったのではなく、禅的な最善な手段で小僧の指を切ったのだと思われませんが、しっかり小僧に気づきを与えています。つまり弟子へ悟りへの第一歩を踏ませているということです。

CL 的にはこのお話はどのように見て取れるのでしょうか。俱胝和尚はこの小僧けしからんという思いにはなっただけですが、森田的に言って、自己の責任において最善最適な行動を取ったことになるでしょう。CL には事実を受け入れ、目標を知り、なすべきことをなすという教えがあります。弟子がサル真似をしているという事実を受け入れ、弟子に気づきを与えるという目標のもと、冷静になすべきことをしたのではないのでしょうか。もっとも、禅の修行の世界だからこそ、手荒い行動も許されますし、何よりも俱胝和尚は、小僧さんの力量を見越しての行動だったのではと思われます。

では小僧さんはどうでしょう。指を切られて痛い思いをしました。調子に乗っていた自分の行動を反省し、師匠を恨むことなく、恩恵を受け取ってばかりいる自分に気付いたのではないのでしょうか。自分一人では何もできない、周囲から支えられている現実というものを身をもって体験したのではないのでしょうか。これは内観的要素だと言えます。

このように CL では感情や気持ちにとらわれて行動するのではなく、客観的事実を受け入れ、目標をもって最適な行動に着手します。また、人だけではなく、あらゆるものから、受けている恩恵を再認識してゆきます。日頃忙しさにかまけて、つい大事な CL のセオリーを忘れがちですが、気付いたときそのときからでもすぐ実行できるのが CL の良いところです。さあ皆さんは“今”何をしますか？

今回も誌面にて皆さんとお会いできるご縁に感謝して

合掌

(富山県南砺市井波 CL インストラクター)

 [目次へ戻る](#)